

The Characteristics of Students Participating in WAVOC Volunteer Project — Through the WAVOC 2009 Survey —

Toru Kawai,^{1)2)*} Yukino Iwai,³⁾ Chika Hyodo,³⁾ Megumi Akiyoshi³⁾

1) Graduate School of Education, Kyoto University

2) Japan Society for the Promotion of Science

3) The Hirayama Ikuo Volunteer Centre, Waseda University

WAVOC プロジェクトに参加する学生の特徴についての検討

—WAVOC 調査 2009 の分析を通じて—

河井 亨^{1)2)**}, 岩井 雪乃³⁾, 兵藤 智佳³⁾, 秋吉 恵³⁾

1) 京都大学大学院 教育学研究科

2) 日本学術振興会

3) 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター

Abstract — Recently, national student surveys related to the assessment of in-class and out-of-class studies have been carried out. The purpose of this article is to examine students' learning via particular educational practices. This research targeted students who participated in a volunteer activity that was provided by the Hirayama Ikuo Volunteer Centre at Waseda University (WAVOC). Hereafter they will be referred to as WAVOC students. First, I compared WAVOC students with students who participated in national student surveys and examined their campus life. Second, I compared WAVOC students with ordinary students in Waseda University and examined their interactions with their peers, faculty members and others. The main finding was that WAVOC students were more involved in out-of-class studies and had more opportunities for interactions with peers, faculty members and others. Thus, participating in such volunteer activity is effective for student learning and development.

(Revised on 18 September, 2011)

1. 問題と目的

「ティーチングからラーニングへ」というスローガンが広がりを見せつつある今日、学生の学習への関心は高まってきている。大学教育においてラーニ

ングアウトカムを明確にすべしとのプレッシャーは、中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』における学士力の提示をはじめ様々な場所で高まりつつある（川嶋 2009）。また実際に、学生自身においても、学業重視や学習志向の高まりが見ら

*) Correspondence: kawaitohru0702@gmail.com

**) 連絡先：606-8315 京都市左京区吉田近衛町 楽友会館別館

れると報告されている（武内 2003）。

学生の学習を対象にする近年の大学生調査研究（Astin 1993, Pascarella & Terenzini 2005, Kuh et al. 2005, 山田礼子編 2009）では、学生の学習成果に影響を及ぼすものとして、大学機関の特質や学生の背景、教育実践とそこで関わる様々な人々、そして学習を伴う活動が挙げられている。また、授業での学習だけでなく、授業外での経験の重要性も強調されている。

こうした関心の高まりと研究の進展と並行して、日本の高等教育研究においても、京都大学／電通英会共同（2007）の『大学生のキャリア意識調査 2007』、山田礼子ら（2009）の大学生アセスメント調査 JCSS（Japan College Student Survey）、東京大学（2008）の『全国大学生調査』などいくつかの大規模全国調査が実施されてきた。

大規模調査の結果の一つとして、「大学生活の過ごし方」や「2つのライフ（将来展望と目的意識を持った行動の有無）」が学生の学びと成長に重要な影響を及ぼすことと、遊びと学習をバランスよく行う学生が充実した大学生活を送り実際に成長していくことが明らかにされた（溝上 2009）。

こうした大規模調査の一般的な成果は、日本の大学生全体についての知見を提供し、大学教育研究に大きく資するものであると言える。また、こうした調査結果をローカルな教育実践に活かしていくことも試みられている（溝上 2011）。

しかし現状では、学生の学習を調査するのは大規模調査、教育実践はローカルな実践という具合に分断されているように見える。調査と実践の形成的な関係を模索・構築することで、この溝を埋める必要がある。そのための方策の一つとして、特定のローカルな教育実践における学生の学習を調査検討するということが考えられる。本研究では、全国調査と共通項目を用いて、特定のローカルな教育実践に対する調査を検討し、特定の教育実践に参加している学生の特徴とその教育実践との関係を明らかにすることで、調査と実践の形成的関係の構築に向けた第一歩としたい。

そこで、本研究では、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（通称、WAVOC。以下、WAVOC と記す）の教育実践に参加する学生の特徴を検討する。ここで、早稲田大学平山郁夫記念ボラ

ンティアセンター（2010）に基づいて、WAVOC 教育実践の特色を簡単に紹介する。

WAVOC は、授業科目の提供と授業外でのボランティア・プロジェクトの展開を両輪とする大学教育実践をこれまで進めてきた。特に、ボランティア活動を学生に紹介・仲介するに留まる実践が数多く見られる中、授業外でのボランティア活動をプロジェクトとして組織・展開して支援している点は大きな特色である。このボランティア・プロジェクトは、これまでに実践と改善を積み重ねて、構造化された教育実践プログラムとなっている。こうした点が高く評価され、WAVOC 教育実践は、特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP：2005 年度）に選定された。

WAVOC 教育実践は、このように厚みと蓄積のある実践であり、学生の学習にとって有意義な授業外での経験につながっていると推測される。ローカルな教育実践として、このような蓄積と厚みのある WAVOC 教育実践を調査・検討することで、様々な大学教育実践にとって有益な示唆を得ることが期待される。

このボランティア・プロジェクトに参加する学生（以下、参加学生と略す）は、活動を通じて、メンバー、大学教職員、フィールドでの社会人・NPO のプロフェッショナル・当事者といった様々な他者と「関わって」いく。また、参加学生は、活動を通じて得られる他者との「関わり」の中で、自分の生き方について省察し、人生を進めていく。その際に、活動の中での言動や活動全体の質について行う「ふりかえり」が重視される⁽¹⁾。学生たちが「ふりかえり」を共有・議論・吟味し、「ふりかえり」をもとに様々な場所で報告・発表しながら活動を進めていくことが支援されるのである。そしてまた、そうした「ふりかえり」が学生自身の人生についての深い省察に結びつきうると考えられているのである。

本研究の目的は、参加学生の特徴を明らかにすることと、参加学生の学習とボランティア・プロジェクトの活動の関係を明らかにすることである。そのために、WAVOC 提供授業に出席するも、ボランティア・プロジェクトには参加していない学生（以下、非参加学生と略す）と参加学生を比較することを通じて検討していく。まず、大規模調査（京都大学／電通英会共同（2007））において用いられた「大

学生活の過ごし方」と「2つのライフ」という項目を WAVOC 調査でも採用し、この項目の検討によって、参加学生と非参加学生の特徴を概括することを試みる。次に、先の2項目を含む WAVOC 調査では、WAVOC 教育実践の核となる「ふりかえり」の基盤になると考えられる「関わりの機会」として「相談」「協働」「学習活動」の機会を検討し、学生の学習をより多面的に捉えるために「読書冊数」と「学習のアプローチ」を検討する。この検討によって、大学環境を同じくする参加学生と非参加学生の特徴をより詳細に検討していく。

2. 方法

2.1 調査の概要

・大学生のキャリア意識調査 2007（以下、全国調査と略す）

調査は、電通リサーチによるインターネットリサーチ。回答者は全国・国公立私立大学生 2013 名である。ただし、今回の分析で用いるのは、医歯薬系を除いた 1834 名。調査は、2007 年 11 月に実施。

・WAVOC 調査 2009（以下、WAVOC 調査と略す）

回答者は、WAVOC 提供の授業科目の受講生 252 名と WAVOC プロジェクトの参加学生 232 名の 484 名である。調査は、2009 年 6・7 月に実施。

なお、それぞれの回答者は表 1 の通りである⁽²⁾。

全体の結果を歪める可能性を考慮して、その他・欠損値を分析から除外した。

2.2 調査内容

調査表では、学年や性別を尋ねるフェイスシートの他に、以下の項目が尋ねられた。実際の調査では他にもいくつかの質問を設けているが、ここでは本論文の分析に関わるものだけを示す。

【全国調査 WAVOC 調査共通項目】

- ① 大学生生活 山田礼子編（2009）と京都大学／電通英会共同（2007）および溝上（2009）を参考にして、授業、授業外学習、自主学習、読書、マンガ・雑誌、クラブサークル、アルバイト、同性・異性の友人とのつきあい、テレビ、ゲームなど 17 項目（表 2 参照）。それぞれに対して、1 週間に費やす時間数を“(1) 全然ない”“(2) 1 時間未満”“(3) 1-2 時間”“(4) 3-5 時間”“(5) 6-10 時間”“(6) 11-15 時間”“(7) 15-20 時間”“(8) 21 時間以上”の 8 段階評定で回答を求めた。
- ② 二つのライフ 溝上（2001）で使用された項目を使用して、2つのライフ（lives）としての日常生活と人生。「あなたは自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたい）を持っていますか」の問いに「持っている」「持っていない」をまず選択させる。そして、「持っている」と回答した学生に、さらに「その見通しのなかでもっとも重要なものを 1 つ思い浮かべて下さい。あ

表 1. 学年別回答者数

学年	大学生のキャリア意識調査	WAVOC 調査 2009	
		参加学生	非参加学生
1 年	983	30	83
2 年		68	70
3 年	1025	82	44
4 年		43	50
その他（5 年以上・大学院）		9	4
欠損値			1

あなたは、その見通しの実現に向かって、今自分が何をすべきなのかは分かっていますか。またそれを実行していますか。最もあてはまるものを1つお知らせ下さい。」という問いを与え、3択（「何をすべきか分かっているし、実行もしている（理解実行）」「何をすべきかは分かっているが、実行はできていない（理解不実行）」「何をすべきかはまだ分からない（不理解）」）で選ばせた。本研究では使用しないが、調査では「（将来の見通しを）持っていない」と回答した学生にも、「あなたは「自分の将来の見通し」を積極的に求めていますか」「求めている」「求めていない」で回答を求めた。

【WAVOC 調査でのみ使用された項目】

- ③ 読書冊数 「半年間で授業に関連して読書した冊数」（以下、授業関連学習読書）、「半年間で授業に関わりなく読書した冊数（マンガ・雑誌は除く）」（以下、授業関連外学習読書）に対して、“(1) なし”，“(2) 1～4冊”，“(3) 5～10冊”，“(4) 11～20冊”，“(5) 21冊以上”という5段階で評定を求めた。
- ④ 相談の機会 自分の学習活動を「友人・先輩」および「教員」に相談する機会と、自分のキャリアについて「友人・先輩」および「教員」に相談する機会に対して、“(1) 全くおこなわない”，“(2) ときどきおこなう”，“(3) しばしばおこなう”，“(4) 非常によくおこなう”の4件法で回答を求めた。
- ⑤ 協働の機会 「大学の教職員」および「大学外の社会人や一般の方々」と協働する機会に対して、“(1) 全くおこなわない”，“(2) ときどきおこなう”，“(3) しばしばおこなう”，“(4) 非常によくおこなう”の4件法で回答を求めた。
- ⑥ 学習活動 「授業のなかでほかの学生たちと一緒に学習活動に取り組む」「授業外で授業に関連するような学習活動をおこなう（一人で／友達と）」「授業外で教員と一緒に何かをする」というそれぞれの機会に対して、“(1) 全くおこなわない”，“(2) ときどきおこなう”，“(3) しばしばおこなう”，“(4) 非常によくおこなう”の4件法で回答を求めた。
- ⑦ 学習のアプローチ NSSE (2010) を参考にして、

「授業内容をそのまま記憶する（記憶）」「授業内容に関して調べものをしたり、情報収集をしたり、友人と議論したりする（分析）」「新しく学んだ内容を自分なりにまとめる（組織化）」「自分の学習活動に対して省察したり、評価したりする（自己評価）」「他の学生の発表内容やその仕方について議論・評価すること（他者評価）」「授業で学んだ理論や概念を実際の問題や新しい状況に応用する（応用）」といったそれぞれの学習のアプローチに対して、“(1) あまり重点を置いていない”，“(2) 少し重点を置いている”，“(3) まあまあ重点を置いている”，“(4) 非常に重点を置いている”の4件法で回答を求めた。

3. 結果と考察

3.1. 全国調査との比較——結果

まず、全国調査の結果（溝上 2009）について概説する。図1は、大学生活の過ごし方17項目の各項目の得点である。全国調査の分析では、17項目は、因子分析によって「授業外学習・読書」、「インターネット・ゲーム・マンガ」、「友人・クラブサークル」の3因子にまとめられた。3因子それぞれの因子得点を用いてクラスター分析を行い、その結果得られた4つのクラスターがグループ1～4である。なお、グループ1とグループ2はともに、「授業外学習・読書」と「友人・クラブサークル」に時間を費やしておらず、「インターネット・ゲーム・マンガ」に時間を費やすのがグループ1でそうではないのがグループ2である。また、全体的に見て大学生生活の充実や「遊び」に関わる項目で得点が高いのはグループ3・4であるが、両者の間に有意差は見られない。しかし、将来の見通しを持ち、学習に向かい、遊びと学習をバランスよく行って、知識・技能を身につけることができているのはグループ3であった。このことから、「授業外学習・読書」因子と「友人・クラブサークル」因子が学生の学びと成長にとって重要であることが明らかにされた。

以上の結果と分析を踏まえ、全国調査の大学生と参加学生・非参加学生とを比較していく。全国調査の大学生活の因子分析において「授業外学習・読書」

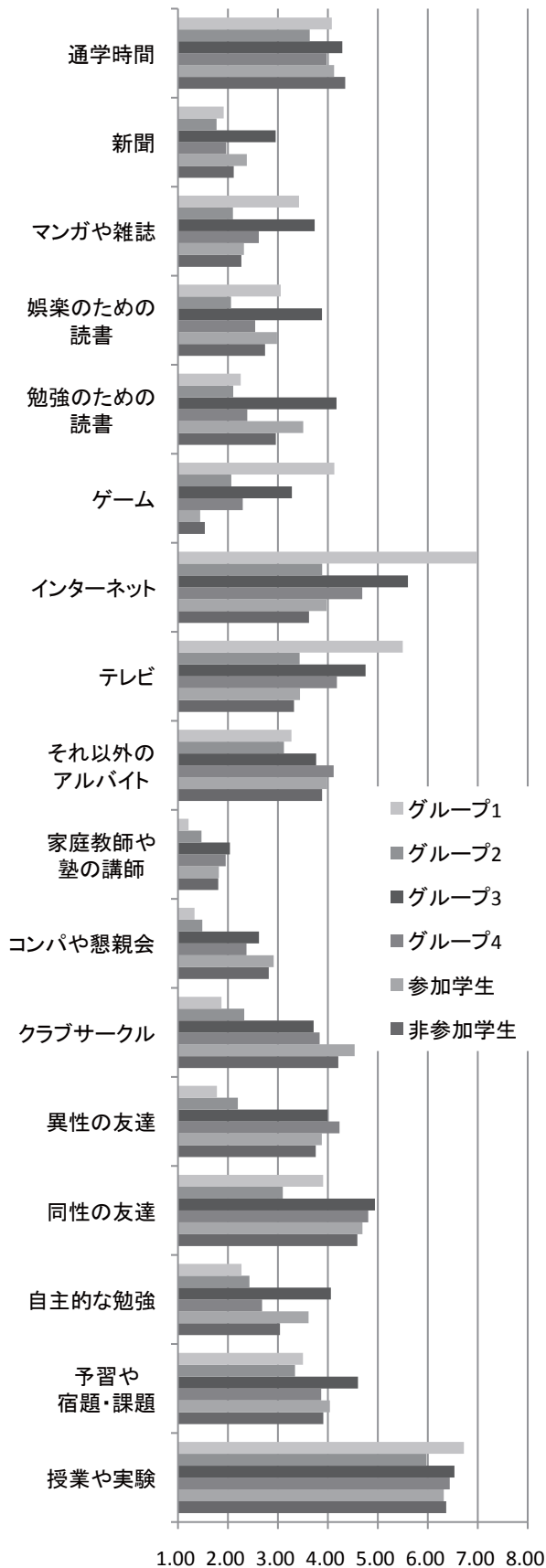


図 1. 大学生生活の過ごし方の各項目の得点

(注 1) グラフの値は, “(1) 全然ない”, “(2) 1 時間未満”, “(3) 1 ~ 2 時間”, “(4) 3 ~ 5 時間”, “(5) 6 ~ 10 時間”, “(6) 11 ~ 15 時間”, “(7) 16 ~ 20 時間”, “(8) 21 時間以上” の 8 段階の回答での, 各グループの平均値を意味する。

(注 2) 各グループ 1 ~ 4 の類型は, 次の手順で作成されたものである。大学生生活の過ごし方項目を因子分析によって 3 因子にまとめる (「授業外学習・読書」因子, 「インターネット・ゲーム・漫画」因子, 「友人・クラブサークル」因子)。それぞれの因子は 1 週間に大きくどのような活動に時間を費やしているか, を表すものである。3 因子それぞれの因子得点を用いてクラスター分析を行い, その結果得られた 4 つのクラスターがグループ 1 ~ 4 である。なお, 全体的に見て大学生生活が充実しているのはグループ 3・4 であるが, 両者の間に有意差は見られない。しかし, 将来の見通しを持ち, 遊びと学習をバランスよく行い, 知識・技能を身につけているのはグループ 3 である (溝上 2009)。

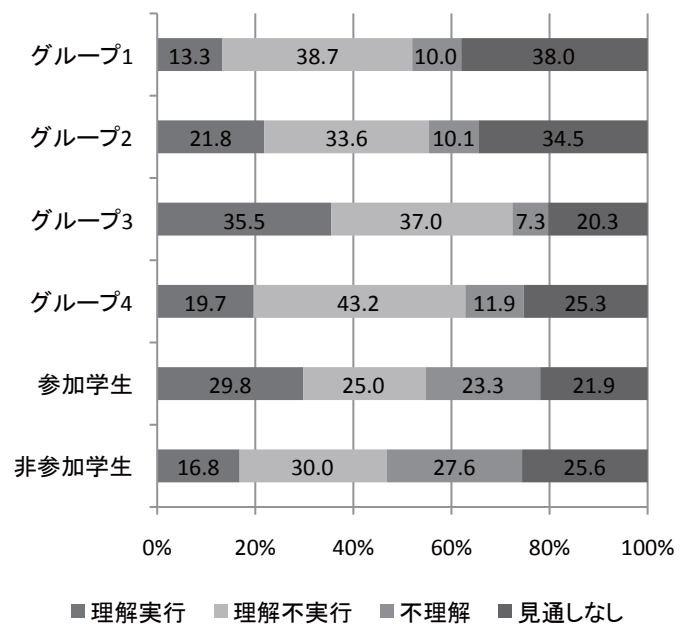


図 2. 2 つのライフの比較

因子と「友人・クラブサークル」因子の構成に特に寄与した項目に着目する。それは、「授業外学習・読書」因子については、勉強のための本（新書や専門書など）を読む」と「授業とは関係のない勉強を自主的にする」、「友人・クラブサークル」因子については、「異性の友達と交際する」と「同性の友達と交際する」であった。

これらの項目について、図1を見てみると、学習に関わる「勉強のための読書」と「自主的な勉強」については、グループ3が4つのグループの中で群を抜いて高い得点であることが分かる。参加学生と非参加学生は、グループ1・2・4と比べて高い得点であるが、グループ3により接近しているのは参加学生であるという位置関係にある。次に、遊びに関わる「異性との交友」と「同性との交友」については、グループ3・4が他の2グループよりも得点が高い。参加学生と非参加学生は、ともにグループ3・4に接近しており、どちらかと言うと参加学生の得点が高いという位置関係にある。

次に、2つのライフの「理解実行」「理解不実行」「不理解」「見通しなし」の各群の割合を示したのが図2である。図から、グループ1・2は、「見通しなし」が多く、グループ4は「理解不実行」が多く、グループ3は「理解実行」が多いことが分かる。参加学生と非参加学生については、「見通しなし」が少なく、「不理解」が多いということが共通して見られる。また、参加学生は、4グループと比べても、非参加学生と比べても、「理解不実行」が少ない。そして、非参加学生と比べて「理解実行」が多く、グループ3に接近する位置関係にある。

3.2. 全国調査との比較——考察

ここまで、学生の学びと成長を探るのに有効な「大学生活の過ごし方」と「2つのライフ」を分析してきた。その結果から、大学生活の過ごし方については、参加学生と非参加学生は、遊びと学習をバランスよく行うグループ3に近い位置にある。そして参加学生のほうがよりグループ3に近い。また、2つのライフについても同様の位置関係が見られた。

したがって、全国の大学生全体と比べると、参加学生と非参加学生は、遊びと学習をバランスよく行い、将来への見通しをもって実行に移すグループに

近い位置にあるという特徴を示している⁽³⁾。この結果だけからは、この学生の特徴が、WAVOC教育実践の効果なのか早稲田大学という大学機関の特質や環境（偏差値、都市型私立等）によるものなのかはわからない。そこで、次に、WAVOC調査の分析によって、大学機関の特質や環境を同じくする参加学生と非参加学生を比較して検討する。ここまでの結果から、参加学生のほうがよりグループ3に近い位置にあることが明らかになっているが、その点についてもより詳しく検討する。したがって、「大学生活の過ごし方」と「2つのライフ」に加えて、「相談」「協働」「学習活動」の機会と「学習へのアプローチ」と「読書冊数」について、参加学生と非参加学生を比較して検討する。

3.3 WAVOC調査の検討—結果

大学生活17項目に対して1週間に費やす時間数を因子分析（主因子法、Promax回転）し、解釈可能な3因子を抽出した（表2参照）。それぞれの因子は、大規模な全国調査に基づく研究（溝上（2009）他）とほぼ同じ分類と項目構成であったので、同じ因子構造と判断し、「友人・クラブサークル」「授業外学習・読書」「インターネット・ゲーム・マンガ」に時間を費やしているかどうか、と名づけられた。これまでの研究と同じく、全学生が偏りなく時間を費やすと考えられる授業時間やアルバイトは因子分類には表立って寄与しなかった。以下、因子得点を算出して分析を行った。

参加学生／非参加学生を独立変数、大学生活に関する3因子の因子得点を従属変数としてt検定結果を図にまとめたものが図3である。結果、「授業外学習・読書」因子に関して、参加学生の得点が非参加学生よりも高かった（ $t(405.93) = 3.69$, $p < .001$ ）。「友人・クラブサークル」と「インターネット・ゲーム・マンガ」の得点に有意差はなかった。

また、2つのライフについての参加学生と非参加学生の比較結果は、すでに触れた図2のとおりであるが、 χ^2 検定の結果1%水準で有意差が見られ、残差分析の結果、有意に多く見られたセルは参加学生の「理解実行」であった。

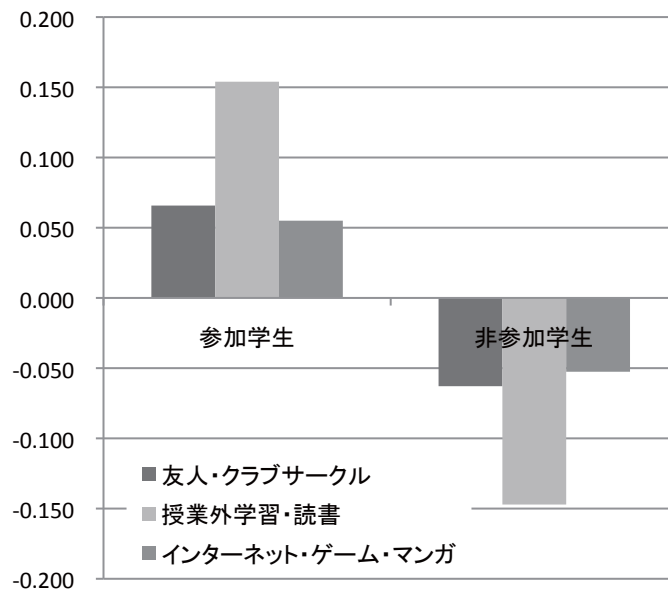
次に、学習活動やキャリアについて友人・先輩あるいは大学教員に相談する機会については、

表 2. 大学生生活の過ごし方の因子分析結果

		因子 1	因子 2	因子 3
【因子 1】 友人・クラブサークル				
Q5	異性の友達と交際する	0.856	-0.014	-0.033
Q4	同性の友達と交際する	0.676	-0.050	0.054
Q6	クラブ・サークル活動をする	0.407	-0.020	-0.157
Q7	コンパや懇親会に参加する	0.339	-0.063	0.180
【因子 2】 授業外学習・読書				
Q13	勉強のための本（親書や専門書など）を読む	0.043	0.770	0.023
Q3	授業とは関係のない勉強を自主的にする	0.203	0.606	-0.044
Q2	授業に関する勉強（予習や復習、宿題・課題など）をする	-0.135	0.529	-0.063
Q1	大学で授業や実験に参加する	-0.136	0.276	0.008
Q16	新聞を読む	0.003	0.268	0.221
Q9	家庭教師や塾の講師以外のアルバイトをする	0.127	-0.219	0.138
Q8	家庭教師や塾の講師のアルバイトをする	-0.055	0.209	0.135
Q17	通学にかかる時間	-0.049	0.186	0.158
【因子 3】 インターネット・ゲーム・マンガ				
Q15	マンガや雑誌を読む	0.032	-0.016	0.615
Q10	テレビをみている	-0.048	0.046	0.513
Q11	インターネットサーフィンをする	-0.145	0.083	0.489
Q12	ゲーム（ゲーム・コンピュータゲーム・オンラインゲーム）をする	-0.013	-0.078	0.432
Q14	娯楽のための本（小説や一般書など、ただしマンガや雑誌を除く）を読む	0.128	0.051	0.370

因子相関行列

因子	1	2	3
1	1.000	0.167	0.396
2	0.167	1.000	0.084
3	0.396	0.084	1.000



(注) 回答者数は、参加学生 215 名、非参加学生 225 名。

図 3. 大学生生活の過ごし方因子得点の参加学生と非参加学生の比較

表 3. 参加学生と非参加学生の相談機会の平均 (SD)

	参加学生	非参加学生	t 検定の結果
自分の学習活動を友人・先輩に相談	2.21 (0.91)	2.01 (0.91)	t(466)=2.356, p<.05
自分の学習活動を教員に相談	1.57 (0.76)	1.37 (0.61)	t(434.661)=3.141, p<.01
自分のキャリアを友人・先輩に相談	2.29 (0.97)	2.37 (0.94)	t(465)=2.575, p<.01
自分のキャリアを教員に相談	1.51 (0.76)	1.31 (0.60)	t(431.013)=3.178, p<.01

表 4. 参加学生と非参加学生の協働機会の平均 (SD)

	参加学生	非参加学生	t 検定の結果
大学の教職員と協働	1.58 (0.80)	1.21 (0.52)	t(385.188)=5.939, p<.001
大学外の社会人や一般の方と協働	2.15 (1.01)	1.87 (1.01)	t(466)=3.072, p<.01

表 5. 参加学生と非参加学生の学習活動機会の平均 (SD)

	参加学生	非参加学生	t 検定の結果
授業で他の学生と学習活動	2.37 (0.91)	2.41 (0.89)	n.s.
授業外で一人で学習活動	2.34 (0.91)	2.08 (0.85)	t(457.704)=3.202, p<.01
授業外でグループで学習活動	1.93 (0.87)	1.66 (0.71)	t(468)=3.651, p<.001
授業外で教員と一緒に活動	1.60 (0.81)	1.25 (0.57)	t(404.214)=5.503, p<.001

表 6. 参加学生と非参加学生の学習アプローチの平均 (SD)

	参加学生	非参加学生	t 検定の結果
記憶	2.05 (0.91)	2.07 (0.86)	n.s.
分析	2.56 (0.89)	2.39 (0.91)	t(463)=1.972, p<.05
組織化	2.59 (0.85)	2.47 (0.91)	n.s.
自己評価	2.48 (0.87)	2.27 (0.90)	t(462)=2.478, p<.05
他者評価	2.28 (0.87)	2.18 (0.90)	n.s.
応用	2.60 (0.92)	2.57 (0.93)	n.s.

表 7. 参加学生と非参加学生の読書冊数の平均 (SD)

	参加学生	非参加学生	t 検定の結果
読書冊数 (授業関連読書)	2.73 (0.95)	2.41 (0.82)	t(447.093)=3.8256, p<.001
読書冊数 (授業関連外・自主読書)	3.20 (1.16)	2.86 (1.05)	t(457.877)=3.340, p<.001

全て参加学生が非参加学生よりも多かった (表 3) (t(466)=2.36, p<.05; t(434.66)=3.14, p<.01; t(465)=2.58, p<.01; t(431.01)=3.18, p<.01)。

大学の教職員または大学外の社会人や一般の方々と協働する機会についても、ともに参加学生が非参加学生よりも多かった (表 4) (t(385.19)=5.94, p<.001; t(466)=3.07, p<.01)。

学習活動の機会については、授業での他の学生との学習活動については有意差が見られなかったが、

授業外での学習活動に関する機会 (一人で・グループで・大学教員と) については、参加学生が非参加学生よりも多かった (n.s.; t(457.70)=3.20, p<.01; t(468)=3.65, p<.001; t(404.21)=5.50, p<.001)。

また、学習アプローチについては、記憶・組織化・他者評価・応用に関しては、参加学生と非参加学生の間には有意差が見られなかったが、分析と自己評価については、参加学生が非参加学生よりも重視していた (表 6) (n.s.; n.s.; n.s.; n.s.; t(463)=1.97,

$p<.05$; $t(462)=2.48$, $p<.05$ 。

最後に、授業関連読書冊数と授業関連外読書冊数については、ともに参加学生が非参加学生よりも多かった（表 7）($t(447.09)=3.84$, $p<.001$; $t(457.88)=3.34$, $p<.001$)。

3.4 WAVOC 調査結果の検討—考察

ここで、非参加学生との比較において、参加学生の特徴について考察する。大学生生活の過ごし方の検討結果から、参加学生は「授業外学習・読書」に非参加学生よりも多くの時間を費やす大学生生活を過していると言える。そして、そうした大学生生活の中で、参加学生は、大学の教職員や大学外の社会人や一般人と協働する機会が多く、自分自身のキャリアや学習活動について友人・先輩や大学教員に相談する機会が多い。参加学生は、プロジェクトの活動があることで、こうした他者との関わりを持つことができ、その関わりを通じて自分の人生・キャリアや学習活動を相談し、省察していると考えられる。関わりの機会は、学生の学びと成長にとってプラスに作用する点は、これまでの大規模調査でも指摘されてきたことである (Pascarella & Terenzini 2005)。参加学生は、プロジェクトの活動によってもたらされるこれらの協働と相談の機会を通じて、自分の将来の見通しを持って、現在すべきことを理解し、そして実行に移すことへ後押しされていると考えることができる。

また、「授業外学習・読書」により多くの時間を費やす参加学生は、授業外での学習活動（一人で・グループで・大学教員と）の機会が多い。また、参加学生は、分析したり自己評価したりする学習アプローチに多くの重点を置いている。そして、授業とは関連のない自主的な読書の冊数が非参加学生よりも多い。このことから、プロジェクトに参加する学生たちは、授業外学習をより積極的に行っていると言える。そればかりでなく、授業に関連する読書冊数も非参加学生より多く、授業での学習への波及効果も十分にありうる。

そして、「自分の学習に対して省察したり、評価したりする自己評価」という学習アプローチは、WAVOC 教育実践の特徴である「ふりかえり」の重視と呼応しており、参加学生のほうがこの学習アプ

ローチを重視するとしている。ここから、「ふりかえり」重視の WAVOC 教育実践は、学生の学習アプローチを支援することにもつながっていると考えることができる。

4. 総合考察

本研究の目的は、WAVOC のボランティア・プロジェクトという教育実践に参加する学生の特徴を明らかにすることと、参加学生の学習とその教育実践との関係について明らかにすることであった。

これまでの調査結果と考察から明らかになった WAVOC 教育実践に参加する学生の特徴は、ボランティア・プロジェクトでの活動を通じて、相談・協働の機会を得て、他者との関わりを通じて生き方を省察しながら人生を進めていくことと、授業外での学習を積極的に行っていることである。では、参加学生は、こうした活動と学習とをどのように関係させているのであろうか。活動と学習は双方向に結びつけながら関係させることができる。まず、活動から学習への結びつきとして、フィールドでの経験から生まれた興味関心によって、学生が学習に向かうということが考えられる。また、フィールドで生きる様々な人々（当事者の人々や社会人）と関わりながら活動を進めていくことで、フィールドとそこで生きる人々について知る責任の感覚をもって学習に向かうということも考えられる。また逆に、学習から活動への結びつきとして、学習を通じて知識を得ることで責任ある行動やフィールドの人々からの承認につながり、活動の質が高まるということが考えられる。活動を継続していく中で、活動と学習との間で有機的な関連を生み出し、活動をより発展させていくことができるのである。そしてさらに、フィールドでの様々な人々やプロジェクトのメンバーといった他者との関わりにおいて信頼関係を深めていくことにもつながるのである。このように、WAVOC 教育実践において構造化される「関わり」の機会が、WAVOC 参加学生の活動と学習とその結びつきに対して、重要な役割を果たしている。

さらに、こうした活動と学習の発展と、他者との関わりにおける信頼関係の深化に、WAVOC 教育実践がその意義を強調する「ふりかえり」もまた、重

要な役割を果たす。お互いの経験や言動について感じ考えたことを共有し、吟味し、議論することで、互いのパースペクティブを理解し、自らの鑑識眼を養うことにつながるのである。

この点で、フィールドの専門家かつ先行者である大学教職員が活動と「ふりかえり」を支援することが学生の活動にとっても学習にとっても重要である。教職員から見た学生の活動と学習は、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (2010) に活写されている。学生は、大学教職員との協働を通じて活動し、学習しているのである。大学教職員との協働などの関わりの機会は、学生の学習を向上させる要因なのである (Kuh & Hu 2001; Pascarella & Terenzini 2005)。

こうして「ふりかえり」は、他者との「関わり」である協働・相談・学習活動の機会の中で重要な役割を果たし、それによって学生たちが生き方を省察し、人生を進めることを支えることにつながっていくのである。WAVOC 教育実践は、このように、「関わり」と「ふりかえり」の機会を構造化することで、学生の活動と学習の足場となっていると考えられるのである。

さらに、「ふりかえり」の強調は、参加学生の学習アプローチである自己評価の重視に影響を及ぼしていると考えられた。このことは、WAVOC 教育実践で「ふりかえり」が強調されたことによる効果と考えることもできるが、学生がプロジェクトの活動を通じて日々取り組んでいることを自らのものとし、転じて自らの学習においても重視していると考えられることもできる。また、「ふりかえり」から学習への方向だけでなく、学習を通じて「ふりかえり」を深めていくというように学習から「ふりかえり」への方向で結びついていくことも考えられる。ここに、他者との「関わり」とその中で行われる「ふりかえり」を媒介に、活動と学習が双方向に結びついていることを認めることができる。参加学生たちは、WAVOC 教育実践を足場に、より広く大学生活の中で、学習を展開していくことができるのである。

大学教育実践が授業外での活動に学生を巻き込んでいく中で、学生が活動と学習とを結びつけて、双方を発展させていくことについて考察してきた。キャリア教育や地域との連携など様々な領域で展開されている大学教育実践の多くは、学生を特定の活

動に巻き込んでいる。学生にとっても、活動のグループにとっても、また活動に関わる多くの人々にとっても、学生が活動と学習の間に有機的な関係を築き双方を発展させていくことは重要な意義を持つ。大学教育実践にとって教育的に意義のある役割の一つとして考えられるのは、各々の状況と特徴を活かして活動を支援するだけでなく、学生がこうした活動と学習との関係を築くことを支援していくことである。

最後に、今後の課題をいくつかまとめておく。本研究では、参加学生が積極的な授業外での学習に取り組んでいることが明らかにされた。だが、学習の質を高めるためには、さらに授業での知識を活かしていくことが重要であると考えられる。それは、WAVOC が言うところの「問題を社会の仕組みの中に位置づける力」を育むことに通じる。そのために授業での学術的な知識は不可欠である。授業での学習と授業外での学習をバランスよく行っていくことが、学生の学習と成長にとって重要な課題である (溝上 2010)。フィールドでの活動、そこでの自分の経験、そこで関わる人々について、学術知を学んで社会的・歴史的に広いパースペクティブから理解しようと試みるのが、活動と学習の双方の発展にとって重要な役割をもつ。本研究では、授業での学習への波及効果として授業に関連する読書冊数の量が見出された。だが、授業での学習からの影響は分析することができていない。また、この授業での学習と授業外での活動および学習の双方向の結びつきは多岐にわたるものと考えられる。今後の検討課題としたい。

本研究では、WAVOC 教育実践と学生の学習との関連を探ってきた。WAVOC 教育実践についての「関わり」と「ふりかえり」のように、実践の中で重要な役割をもつ営みが学生の活動と学習にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることが重要である。それが、その教育実践の特徴を明確に構造化し、その教育実践の効果について明らかにすることにつながる。しかし同時に、そうした実践の中核的営みを学生がどのように活用しているかについても明らかにしなくてはならない。教育実践の効果として、教育実践の中で強調される営みから一方向的に学生の活動と学習を規定するのではなく、学生がそうした営みをどう自らのものとするかまたどう捉え

直していくかを検討することが重要なのである。

そしてまた、活動と学習の関係にしても、教育実践と学生の活動・学習との関係にしても、双方向に結びついていること、それらの関係は人生や大学生活という時間の流れの中で学生が試行錯誤することを通じて変化していくものであることを考慮しなくてはならない。こうした点は、実践に参加する学生の活動と学習の実際のパフォーマンスを検討することでもまた詳細に検討することができると考えられる。具体的には、WAVOC 教育実践の重視する「ふりかえり」と学生の学習と成長との関連について、さらに詳細に検討することが今後の課題である。

こうした調査研究の結果と考察については、教育実践の担い手である大学教職員と共有・議論・吟味していく必要がある。本研究の場合、WAVOC 教職員の方々と結果と考察を共有・議論・吟味（「ふりかえり」）していく必要がある⁽⁴⁾。それも、調査結果によって、WAVOC 教育実践とそこでの学生の活動と学習を規定するという一方向作用では十分ではない。この「ふりかえり」を通じて、考察を深め課題を明確にして次の調査研究を発展的に構想すると同時に、実践の可能性と方向性を考えていくというように、双方向で働きかけあうことが重要なのである。調査と実践の関係もまた双方向に作用しあうものとなることで、双方を発展させていけるのである。ここに、調査と実践の形成的関係を発展させていく可能性が見出されるのである。

参考文献

- Astin, A.W. (1993) What Matters in College? Four Critical Years Revisited, San Francisco: Jossey-Bass.
- 川嶋太津夫, 2009, 「アウトカム重視の高等教育改革の国際的動向——「学士力」提案の意義と背景」『比較教育学研究』38: 114-131.
- Kuh, G.D. & Hu, S. (2001), "The Effects of Student-Faculty Interaction in the 1990s," The Review of Higher Education 24(3): 309-332.
- Kuh, G.D., Kinzie, J., Schuh, J.H., Whitt, E.J., & Associates, (2005) Student Success in

college: Creating Conditions that Matter. San Francisco: Jossey-Bass.

京都大学／電通育英会 (2007) 『大学生のキャリア意識調査』.

<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/top.html> (参照日時: 2011 年 1 月 20 日) .

溝上慎一編 (2001) (編) 2001 『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』. ナカニシヤ出版.

溝上慎一 (2009) 『『大学生生活の過ごし方』から見た学生の学びと成長の検討——正課・正課外のバランスの取れた活動が高い成長を示す』『京都大学高等教育研究』15, pp.107-118.

溝上慎一 (2010) 『現代青年期の心理学——適応から自己形成の時代へ』有斐閣.

溝上慎一 (2011) 「学生の大学生活に焦点を当てて FD/ 教育改善とキャリア教育を見直す—「大学生キャリアセミナー京都」の開発—」松下佳代編集代表『大学教育のネットワークを創る』東信堂.

NSSE (2010) NSSE Survey Instrument. http://nsse.iub.edu/html/survey_instruments_2010.cfm (参照日時: 2010 年 1 月 20 日)。

Pascarella, E.T. & Terenzini, P.T. (2005) How College Affects Students, San Francisco: Jossey-Bass.

武内清編 (2003) 『キャンパスライフの今』玉川大学出版部.

東京大学 (2008) 『全国大学生調査 第一次報告書』.

山田礼子編 (2009) 『大学教育を科学する』東信堂.

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 編『世界をちょっとでもよくしたい ～早大生たちのボランティア物語～』早稲田大学出版.

注

1. WAVOC 教育実践における「ふりかえり」は、自分の活動に関連して感じ考えていることを、共有したり、議論したりして、吟味していくことを指している。ただしそれは多様な形態で行われる。まず、「ふりかえり」は、様々な場面で行われる。活

動の中や後でのミーティングで行われることもあれば、活動しながら行われることもある。討議のような形態の中で行われることもあれば、普段のおしゃべりの中で行われることもある。また、「ふりかえり」は、様々な人とともに行われる。学生と教職員の間で、学生同士の間で、学外の実践家との間で行われるのである。その具体例については、WAVOC(2010)を参照願いたい。

2. ピアソンの χ^2 検定の結果、0.1% 水準で有意差が見られた ($\chi^2(4)=35.96, p<.001$)。残差分析の結果、5% 水準以上で有意に多く見られたセルは、非参加学生の一年生と参加学生の三年生のセルであ

る。この点に留意して分析を進める。

3. ただし、参加学生と非参加学生についても、全国調査と同様にクラスター分析を行なうことで、4 グループを抽出することができた。そのクラスターを駆使してどのようなことが言えるかは、現在検討中であり、今後の研究課題としたい。

4. WAVOC 調査 2009 の調査結果のフィードバックは、2010 年 1 月 20 日に実施した。今後も、調査者として、調査結果の再分析・再解釈・再考察を進める必要があり、その度ごとに「ふりかえり」を共有・吟味・議論していく心積もりである。